

『矛盾論』—— その復権と哲学的死 (I)

矢 吹 晋

- I 「主要的矛盾方面」の誤訳
- II 「主要的矛盾方面」はなぜ誤訳されたか
- III 「必有一方面是主要的」, 「矛盾起主導作用」の誤訳
- IV 誤訳によって失われたものは何か
- V 『矛盾論』の構造
- VI 『矛盾論』の実践的意義
- VII 『矛盾論』における「上部構造の反作用」論について
- VIII 『矛盾論』(より一般的には「毛沢東思想」)の意義と限界
- IX 根本矛盾・主要矛盾・基本矛盾とは何か

I 「主要的矛盾方面」の誤訳

『矛盾論』のなかで、「主要な矛盾・矛盾の主要な側面」なる概念がきわめて重要な位置を占めていることはいうまでもない。だが、まさにこの点において、日本の『矛盾論』研究(研究の名に値するものが存在したかどうかは別として)は、重大な誤訳に基づく誤解をつみ重ねてきたのである(なお、因果関係はまだ調べていないが、後にふれるように英訳も誤訳である。その他の外国語訳はまだ検討していないが、もし英訳に引きずられているとすれば誤訳している可能性がきわめて大きい)。

さて何を誤訳したのか。『矛盾論』第4章の標題は「主要的矛盾和主要的矛盾方面」となっているが、この個所を従来の訳本はすべて次のように訳してきた。「主要な矛盾と矛盾の主要な側面」。ここで従来の訳書のすべてを検討する余裕はないので、検討の対象を次の7書にしぼることにする。

- a. 松村一人・竹内実訳『実践論・矛盾論』

(岩波文庫, 1957年5月刊, ただしわれわれの使用するのは1969年10月発行の第17刷)。

- b. 竹内好訳「矛盾論」(『世界教養全集』, 第15巻, 平凡社, 1962年2月刊, ただしわれわれの使用するのは1969年7月発行の第17版)。

- c. 尾崎庄太郎訳『実践論・矛盾論』(青木文庫, 1964年9月改訂第1刷, ただしわれわれの使用するのは, 1970年5月発行の改訂第8刷)。

- d. 安藤彦太郎訳『実践論・矛盾論』(角川文庫, 1965年11月刊, ただしわれわれの使用するのは1970年2月発行の第7版。)

- e. 浅川謙二・安藤彦太郎訳「矛盾論」(『世界の大思想』, II-16, 河出書房, 1967年10月初版)。

- f. 北京外文出版社『毛沢東選集』(1968年初版)第1巻所収の邦訳。

- g. 小野和子訳「矛盾論」(『世界の名著』, 64, 中央公論社, 1969年7月初版)。

いま、既訳のなかでかなり広い読者をもつとみられる七つの訳を刊行順にa~gと呼ぶことにする。a~gのすべてが前述のように訳してきたのであるが、「主要的矛盾方面」を「矛盾の主要な側面」と訳すのは、(1)中国語の構造からみても、(2)毛沢東の論理構造からみても誤りである。この個所は「主要な矛盾の側面」あるいは「主要矛盾の側面」と訳さなければならない。(1)の中国語の構造からみてこれが誤訳であることは、「矛盾の主要(な)側面」と訳さなければならないのは、「矛盾的主要方面」「矛盾之主要的方面」(『毛沢東著作選

読』甲種本，人民出版社，1964年，98,103ページ。以下毛沢東の原文はすべてこの本から引用する）であることを指摘するだけで十分はなはずだが念のためにあとでくわしく論ずる（Ⅱをみよ）ことにして先を急ごう。

次に(2)の毛沢東の論理構造からみた場合。毛沢東の論理構造を二つの点からみていく。第1に論理展開の順序。第4章では、まずいくつかの矛盾のなかから「主要な矛盾」を探しだし、次にその「主要な矛盾」のなかから「主要な側面」を探しださねばならないことを論じている。しかし、標題の段階では、「主要な矛盾」に「側面」があることまで示唆しただけで、「側面」の内容には立ち入っていない。第2に論理の強調。標題が第4章全体の総括であることを考えれば、この論理の強調こそより重要であろう。つまり、「側面」の内容に立ち入っていないことは、逆にいえばここでははなによりもまず「主要な矛盾」が強調されており、また「側面」を「主要・次要」という〈対立の視点〉からではなく、〈統一の視点〉からとらえたことによって、「主要な矛盾」と「主要でない矛盾」との「相互転化」が強く意識されている。

ふたたび論理展開の順序にもどろう。「矛盾の主要な側面」なる概念は第4章の3分の1がすぎたところで登場する。

「矛盾着的両方面中、必有一方面は主要的、他方面は次要的。其主要的方面、即所謂矛盾起主導作用的方面。事物的性質、主要地是由取得支配地位的矛盾的主要方面所規定的」（甲種本，98ページ）。

この箇所は『矛盾論』のなかで最も重要な部分の一つであるが、従来きわめて不十分な理解しか行なわれなかった。この問題もあとで検討する（Ⅲをみよ）ことにしてとりあえず先を急ごう。

これまで「主要な矛盾の側面」（主要的矛盾方面）

と「矛盾の主要な側面」（矛盾的側面）とが区別されず、前者を後者のごとく誤読してきたため、「主要な矛盾の側面」という概念を圧殺し、「主要な矛盾の側面」の一側面である「矛盾の主要な側面」でおきかえてきたわけである。以上の点を整理すれば次のごとくである。

〔原文〕 〔既訳の誤訳〕

{ 主要的矛盾
 非主要的矛盾

主要的矛盾方面 → 矛盾の主要な側面

{ 矛盾的側面
 矛盾的側面主要方面

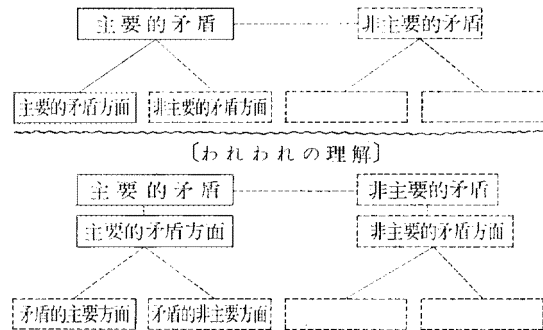
非主要的矛盾方面 → 矛盾の主要でない側面

{ 矛盾的側面
 矛盾的非主要方面

既訳の理解とわれわれの理解との差を図示すれば第1図のとおり。

第 1 図

〔既訳の理解〕



（注） 図において実線部分は明示的に言及した概念，点線部分は implicit に想定されているもの。

なお、ここで念のために、既訳の誤訳箇所を確認しておく。

原文＝主要的矛盾和主要的矛盾方面（甲種本，67，95ページ，まえがき，第4章標題，第4章の初め）

a 訳，主要な矛盾と矛盾の主要な側面

33，61（2カ所）ページ

b 訳, a 訳に同じ	197, 215 (2カ所)	ページ
c 訳,	"	36, 74 (") ページ
d 訳,	"	37, 63 (") ページ
e 訳,	"	65, 80 (") ページ
f 訳,	"	443, 472 (") ページ
g 訳,	"	367, 389 (") ページ

われわれの理解によればすべて誤り。「主要な矛盾と主要な矛盾の側面」と訳すべき。

原文＝主要的矛盾方面和非主要的矛盾方面（甲種本，104ページ，第4章の終り）

a 訳, 矛盾の主要な側面と矛盾の主要でない側面	70ページ。	
b 訳, a 訳に同じ	220ページ。	
c 訳,	"	86ページ。
d 訳,	"	71ページ。
e 訳,	"	84ページ。
f 訳,	"	480ページ。
g 訳,	"	395ページ。

すべて誤り。「主要な矛盾の側面と主要でない矛盾の側面」と訳すべき。a 訳は「主要な矛盾の側面」を具体的に説明したことになる。

II 「主要的矛盾方面」はなぜ誤訳されたか

既訳は単語の結びつきを次のようにとらえた。

主要的 矛盾 和 主要的 矛盾方面——A

この個所だけに限定して、しかも中国語の構造だけからいえば、既訳の解釈もありうる。しかし、毛沢東の論理を考えると、既訳はとうてい承認しがたい。まず第1に、既訳では「主要な矛盾・主要でない矛盾」というときの「主要な」と、「矛盾の主要な側面・主要でない側面」というときの「主要な」を並列させている。ところが、この二

つの「主要な」を毛沢東は厳密に区別した。たとえば次の表現をみよ。

「事物的性質， 主要地是由取得支配地位的矛盾的主要方面所規定的」（甲種本，98，99ページの2カ所）。

「取得支配地位的矛盾的主要方面起了變化， 事物的性質也就隨着起變化」（99ページ）。

この二つの例文で「取得支配地位的矛盾」とは「主要的矛盾」と同義であること、しかも毛沢東は後者を使わずわざわざ前者にいいかえたこと、に注目してほしい。むしろ、「矛盾的な主要方面」の「主要」との混同を避けるためにいいかえたこととみていいであろう。くり返していえば、毛沢東は「主要矛盾的主要方面」という紛らわしい表現をとらなかったのである。

既訳はAを〈形式的対照性〉においてとらえたため二つの「主要的」の〈重さ〉〈かたさ〉の差をとらえきれなくなった。

誤訳の根拠と思われるものをあと二つあげておきたい。まず単純なことからいえば、A がもし次のA'のごとく表現されていたら誤読の余地はなかったであろう。

「主要的矛盾和主要矛盾的方面」——A'

毛沢東はなぜA'の表現をとらなかったのでしょうか。まえがきを除けば「主要的矛盾」なる概念はここで初めて提起される。したがって、この5文字の緊密なつながりをたいせつにしなければならなかったのではないか。「主要的矛盾的方面」の二つの「的」のうち、後者を落としたことの中に、毛沢東の読者を意識した緊張感を読みとることができる、とわれわれは考える。

最後により重要な理由を指摘してこの章の結びとしたい。次の二つの例文を比較せよ。

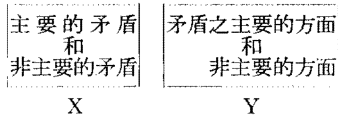
「主要的矛盾和非主要的矛盾以及矛盾之主要的

方面和非主要的方面這兩種情形」——B（甲種本，103ページ）。

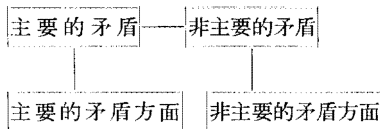
「對於主要的矛盾和非主要的矛盾・主要的矛盾方面和非主要的矛盾方面的研究」——C（甲種本，104ページ）。

B，Cはそれぞれ次のように図示しうる。

〔Bの図〕



〔Cの図〕



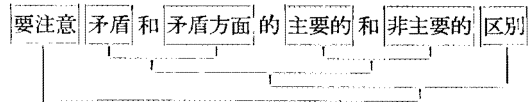
B図から明らかなように、Bの例文のなかではX・Yが「兩種情形」「兩種矛盾情況」として〈並列〉〈同じ重さ〉でとらえられている。つまりここでは〈差別性〉として〈分析的〉に把握されている。これに対し、Cの例文における四つの概念は〈立体的〉〈構造的〉〈総合的〉視点から把握されている。

既訳はBにおける〈分析的把握〉とCにおける〈構造的把握〉とを区別できなかった。そしてCをBにおきかえてしまったのだ。この結果Cが抹殺されたのはもちろん、B自体をも正当にとらえきれなくなった。なぜならBはCとの対比においてその意義が浮彫りにされるのであって、C=Bとするとき、Bの意味さえ半分以上失わせるのだ。そして既訳の読者は「毛沢東は全く同じことばを2回もくり返すクドイ男」という印象をいだかされたり、あるいは同じことばをくり返すことこそ毛沢東の大衆性だとサッカクしたりする。いずれにせよ有害であることに変わりはない。

C=Bの結果、毛沢東が第7章の結論でB・C

を次のように総括していることの意味も半分以上失われたと思われる。

「要注意矛盾和矛盾方面的主要的和非主要的區別」（甲種本，117ページ）。



III 「必有一方面是主要的」，「矛盾起主導作用」の誤訳

さきほど残してきた問題を片づけてから、誤訳によって失われたものが何かを検討しよう。

さきに引用した原文をもう一度掲げる。

「矛盾着的兩方面中，必有一方面是主要的，他方面是次要的。其主要的方面，即所謂矛盾起主導作用的方面」（甲種本，98ページ）。

この個所はこれまで次のように訳されてきた。

a 訳（松村一人・竹内実）

矛盾する二つ側面のうち、かならず一つが主要な側面であり、他の側面は第二義的な側面である。主要な側面とは、矛盾において主導的なのはたらきをしている側面のことである（64ページ）。

b 訳（竹内好）

矛盾する両側面のかならず一側面が主要、他の側面が次要である。その主要な側面こそ、矛盾に指導作用をはたらかしめる側面なのだ（217ページ）。

c 訳（尾崎庄太郎）

矛盾する二つの側面のうち、かならず、その一つが主要な側面であり、他は副次的な側面である。その主要な側面とは、矛盾において主導的な役割をはたす側面のことである（78ページ）。

d 訳 (安藤彦太郎)

矛盾する両側面のうち、かならず一側面は主要、他の側面は副次的である。その主要な側面とは、矛盾が主導的な役わりをはたすというその側面である (66ページ)。

e 訳 (浅川謙次・安藤彦太郎)

矛盾する二つの側面のうち、かならず、その一方が主要な側面で、他方が、副次的な側面である。主要な側面とは、矛盾のなかで主導的な作用をおこす側面のことである (81ページ)。

f 訳 (北京外文出版社)

矛盾する二つの側面のうち、かならずその一方が主要な側面で、他方が副次的な側面である。その主要な側面とは、矛盾のなかで主導的な作用をおこす側面のことである (475ページ)。

g 訳 (小野和子)

矛盾する二つの側面のうち、かならず一つの側面が主要であり、他の側面は副次的である。主要な側面とはすなわち、矛盾において指導的な働きをする側面のことである (391ページ)。

訳文をみてまず気づくことは「有 yǒu」はどの訳でも全く無視されていることである。ニュアンスの差こそあれすべて「主要な側面であり、……副次的な側面である」と訳している。「有」にもし特別の意味がないなら無視していいが、ここでは無視は決して許されない。毛沢東が矛盾をどのようにとらえているかを知るためのカギの一つが隠されているからだ。この部分は次のように訳さなければならない。

「矛盾している両側面は、一側面が主要であり、他の側面が次要である、ということに必ずなる」。わたくしは中国語学の専門家ではないから上手な説明はできないが、この一文のなかで、「有」が二つの「是 shì」よりもだいじなことばであること

ぐらいは承知している。「専門家」「研究者」であるはずの既訳の訳者たちが、こんなことを知らないとは！ アッと驚くナントカというほかない。「有」の訳をあと二つだけみておこう。

「只有一種主要的矛盾起着領導的作用，是完全沒有疑義的」(甲種本，97ページ)。

「其中必定有一種是主要的，起着領導的・決定的作用，其他則處於次要和服從的地位」(甲種本，97ページ)。

a 訳 「ただ一つの主要な矛盾が指導的なはたらきをすることは、まったく疑いがない」，「そのなかには、かならず主要なものが一つあって、指導的な、決定的なはたらきをし、その他のものは、第二義的で従属的な位置をしめる」(63,64ページ)。

b 訳 「ただ一つの主要な矛盾が指導的作用をはたらくことは、いささかも疑う余地はない」，「そのなかにならず一つだけ、主要な、指導的な、決定力をもった矛盾があり、他の矛盾は次要・従属的位置におかれることがわかる」(216ページ)。

c 訳 「ただ主要な矛盾だけが指導的な役割をはたすことについては、まったくうたがない」，「そのなかでは、かならず、その一つが主要な矛盾であり、それが指導的な、決定的な役割をはたし、その他の矛盾は、副次的な、また従属的な地位にたつ」(77ページ)。

d 訳 「指導的役わりをはたすのが一つの主要な矛盾だけであるのは、まったく疑いがない」，「そのなかにならず一つの主要なものがあって、指導的・決定的な役割りをはたし、他のものは副次的・従属的地位をしめる、ということである」(65ページ)。

e 訳 「指導的な作用をおこすのは一つの主要な矛盾だけであるということには、すこしの疑いもいれない」，「そのなかの一つはかならず主要な

ものであって、指導的な、決定的な作用をおこし、その他は、副次的、従属的地位におかれる」(81ページ)。

f 訳 「指導的な作用をおこすのは、主要な矛盾だけである。これはまったく疑いのないところである」、「そのなかの一つはかならず主要なものであって、指導的な、決定的な作用をおこし、その他は副次的、従属的地位におかれる」(474ページ)。

g 訳 「一つの主要な矛盾だけが指導的な働きをしていることは、いささかも疑い余地がない」、「かならずそのうち一つが主要なものであって、指導的、決定的な働きをし、そのほかは、副次的、従属的な地位にある」(390ページ)。

前半からみていこう。「只有」を正しく訳したのは一つもない。わたくしの仮訳は次のとおり。「一つの主要矛盾が領導作用をすることになるだけだというのは全く疑いない」。後半の「必定有」について事情は同じであり、わたくしはかりに次のように訳しておきたい。「一つが主要なもので、領導的・決定的作用をし、その他は副次的・従属的地位にあるように必ずなる」。

次に「矛盾起主導作用」の訳を検討しよう。この場合、いまの二つの例文が参考になるが、その前に次の二つの例文をみておきたい。

「資産階級由新的起進歩作用的階級、轉化為旧的起反動作用的階級」(甲種本, 99ページ)。

(無産階級)「成為独立的和歷史上起主導作用的階級」(甲種本, 100ページ)。

上の二つの例文において「起進歩作用」「起反動作用」の主体が「資産階級」であること、「起主導作用」の主体が「無産階級」であることは明らかであろう。さきの二つの例文も中国語の構造としては同じだから「起着領導的作用」「起着領

導的・決定的作用」の主体はそれぞれ「一種主要的矛盾」、「一種是主要的」(矛盾)である。

ここで重要なのは中国語の構造としては「資産階級」、「無産階級」と全く同じ意味で「矛盾」が「主体」だということである。前者はだれでも「ブルジョア階級が」、「プロレタリア階級が」と訳すが、後者になるとたちまち日和って、「常識」のかけにかくれようとする。その結果、「矛盾起主導作用」を「矛盾において」、「矛盾のなかで」、「矛盾に」などと訳してしまう。だが、これはきわめて不十分な訳である。中国語の構造を忠実にとらえていないことがまず問題であり、第2にこの訳語によっては毛沢東が矛盾をあたかも〈実体的〉にとらえていることがわからなくなる。

「其主要的方面」というとき、毛沢東は矛盾が構成する2側面を〈側面の視点〉〈対立の視点〉からとらえている。「矛盾起主導作用」というとき、矛盾は〈統一の視点〉から把握される。「矛盾起主導作用的方面」というとき、再び〈対立の視点〉に戻るが、ここでは〈統一の視点〉をふまえたうえで、両者の総括としての〈対立の視点〉である。この短い一文のなかで〈視点の移動〉は3回行なわれており、ここではその移動をとらえることが決定的に重要なのである。この部分を論理的に説明することはきわめて容易である。すなわち「主要側面」と「次要側面」の「相互転化」(つまり地位の転化)は「主要側面」が「次要側面」へ転化することによって生じるのであり、このとき「矛盾の地位」が転化する。逆にいえば、「矛盾の地位」が転化するのには、「主要側面」が「次要側面」へ転化するときである。この単純明快な論理がどうやら既訳の訳者たちにはよくわからなかったらしい。しかし、われわれがここで問題にしたいのは、むしろ次のことである。毛沢東の論理はもと

もと単純明快なのだから、それを正確にととらえるのは当然の前提だとして、この場合、毛沢東の論理を毛沢東の〈視点の移動〉まで正確におさえたうえでとらえよ、ということだ。そのために、この個所はかりに次のように訳しておきたい。「その主要な側面とは、矛盾が主導作用をする、その側面である」。上に述べた〈視点の移動〉をこの訳文だけで表現することは不可能であるかもしれない。しかし、われわれのような問題意識で『矛盾論』全体を訳すとすれば、既訳とはかなり違ったものになるであろうことはたしかである。それは将来の課題として、ここであと二つのことをいっておきたい。

まずd訳について。この個所に関するかぎりd訳が「矛盾が」、「というその側面」としているのは評価できる。しかし、このd訳は〈および腰〉であり、不安定である。はたして、同じ訳者のe訳では、多数説に逆戻りしてしまった。訳者ももしd訳を誤りだとしてe訳に改めたのであれば、d訳の版を重ねるときe訳の訳語に統一すべきであったし、もしd訳が正しいと信ずるならなぜe訳で別な訳としたのか。訳者の見解をうかがいたいものである。

第2は中国語の文法の問題である。前の一文における「所謂矛盾」はこれまで「場を示す」と解されてきた。「矛盾において」「矛盾のなかで」という訳語は「場」説と無関係ではない。「場」説は、かなり広い概念であるからこの場合もあてはまることはたしかだが、おおまかすぎて、とうてい的確にとらえたとはいえない。この場合、どのように説明すれば必要かつ十分であるのか、中国語学者のご教示をえたいと思う。

VI 誤訳によって失われたものは何か

すでにIIで記したように、「主要的矛盾方面」「非主要的矛盾方面」をそれぞれ「矛盾的主要方面」「矛盾的非主要方面」におきかえてしまった結果、「主要な矛盾の側面」「主要でない矛盾の側面」という二つの概念が失われたことはいまや明らかである。このこと自体が一つの問題であるが、より重要なのは、「矛盾の両側面の相互転化」と「主要矛盾・主要でない矛盾の相互転化」とをつなぐ論理(両者の相互関係)を見失ったことである。しかも、この個所こそ『矛盾論』のなかで最も重要な一部分なのである。

誤訳が何をもたらしたかを知るためには、かの「矛盾論誤訳論争」をみておけばいい。竹内好はかつて次のように書いた(「毛沢東思想の受けとり方——『矛盾論』の翻訳について」、『思想』、1962年3月号、以下④と略す)。

「(c)訳の最初の部分は、単純な誤訳だから、ここでは取りあげない。『其主要的方面、即所謂矛盾起主導作用的方面』が問題である。わたくしは、原文の語勢と、内容の論理から判断して、多少危険だが(d)訳を採用した。じつはわたくしは一晩解釈に苦しんだ。そしてこの訳を思いついたとき、毛沢東の論理展開のすばらしさに改めて三嘆した。(c)訳のような凡庸な説明をこの場所であれがくり返すはずはないと、わたくしは最初から信じていた」。

ここで(c)訳とは松村一人・竹内実の訳、(d)訳とは竹内好のもの。「(c)訳の最初の部分」とは「無論什么矛盾、矛盾的諸方面」を指すが、この個所は松村一人が反論するというように(松村一人「兼せ聴けば明し——竹内好氏への答え」、『思想』、1962年7月号)、竹内好の「単純な誤訳」である。竹内が「一

晩解釈に苦しんだ」一文が誤訳であり、「原文の語勢と、内容の論理」を正しく把握しえていないことはすでにⅢで記した。したがって竹内が「毛沢東の論理展開のすばらしさに改めて三嘆した」というとき、われわれとしては竹内の真意を疑うほかない。

ところで松村一人は前掲論文で次のように反論した。「竹内好訳の誤りは、側面の主要、次要の問題と矛盾の主要、次要の問題とは別の問題であるということを理解しさえすれば、すぐに明白になる。竹内好訳では『その主要な側面こそ、矛盾に指導作用をはたらかかせる側面なのだ』となっている。これでは、すべての矛盾が『主要な矛盾』になってしまう。なぜなら主要矛盾のみでなく、次要な矛盾（つまり、指導的、決定的作用をしない矛盾）も、やはりその主要な側面をもっているからである。毛沢東の著作は『矛盾論』と題されているが、こんな矛盾とは無関係である」（傍点は松村）。

竹内好の松村・竹内訳批判が無内容なら、松村のこの反論もおおよそ奇妙な議論である。松村の文章の強調部分および「なぜなら」以下の理由説明は全く文意不明である。第1に、竹内訳によればなぜ「すべての矛盾」が「主要な矛盾」になるのかわからないし、第2に、「次要な矛盾」も「主要な側面」をもつ、という毛沢東の説明を指摘することがどうして第1の主張の理由づけになりうるのか。これがまともな理性の所有者の文章だといえるのかどうか。

くり返しになるが、ここで毛沢東の論理をもう一度確認してさきへ進むことにしよう。

毛沢東はまず「多数の矛盾」のなかから「領導的作用・決定的作用」をする矛盾、すなわち「主要な矛盾」をとり出し、「主要な矛盾」と「主要でない矛盾」を区別する（甲種本、97ページ）。次に

「主要な矛盾・主要でない矛盾」を問わず「両側面」をもつことを論ずる。第3に「両側面」は「主要な側面」と「主要でない側面」に区別しうることを指摘し、「主要な側面」とは「主導作用」をする側面だと説明する。そして最後に「事物の性質」は「支配的地位を占めている矛盾の主要な側面によって規定される」と結ぶ（甲種本、98ページ）。

以上のように、毛沢東の主張はきわめて論理的であり、通常の理性の所有者なら、だれでもよくわかるように書いてある。この単純明快な論理を既訳者たちがなぜ正しく把握しえなかったのか、全く不可解である。なお、毛沢東はここで「主要な矛盾」については「領導的作用」といい、「矛盾の主要な側面」については「主導作用」といい両者を区別していることに注目せよ。松村・竹内訳は前者を「指導的なのはたらき」、後者を「主導的なのはたらき」と訳し分けているが、竹内好訳は両者をともに「指導的作用」「指導作用」と訳している。われわれは前者を「領導作用」あるいは「領導的作用」、後者を「主導作用」と訳しておきたい。「領導」という日本語はいまや新左翼を中心に広く行なわれつつあるから。

さて竹内好の投じた一石は、竹内の整理（『思想』、63年1月号）によると、次のような波紋をよんだ。

新島淳良「毛沢東思想のヌケ殻」（『図書新聞』、1962年3月31日号）。

松村一人「竹内氏の断定は神託か？」（『図書新聞』、4月7日号）。

西順蔵「実践に結びつく学習」（『図書新聞』、4月21日号）。

竹内好「『矛盾論』論争」と私の立場」（『図書新聞』、4月28日号）。

安藤彦太郎「毛沢東翻訳と中国研究者」（『魯迅友の会会報』、28号）。

松村一人「兼せ聴けば明るし」(『思想』, 62年7月号)。

竹内実「『矛盾論』の翻訳について」(『唯物論研究』, 62年秋号)。

竹内好「ふたたび毛沢東思想について」(『思想』, 63年1月号)。

この論争後、『矛盾論』の翻訳は改訳・新訳あわせて5種類刊行された。わたくしの手許にあるのが5種類であり、実はこのほかにもまだあるかもしれない。訳は改善されたか。yes とはいいがたいことは、すでに指摘した例から明らかであろう。誤訳の検討はおりにふれ 今後も行なうことにして、ここでは先を急ぐことにしよう。

V 『矛盾論』の構造

毛沢東はまず「事物(shìwù)」から出発する。「事物」は「発展(fāzhǎn)」(この「発展」は「運動(yùndòng)」と対比して使われている)して「過程(guòchéng)」として現われる。「過程」は「階段(jiēduàn)」をもつ。「事物」は「物質(wùzhì)」といかえることができる。「物質」は「運動(yùndòng)」して「形式(xíngshì)」をもつ。

以上の「」内のことばはすべて中国語であるが、このまま日本語として読んでいい。(ただし「階段」は「段階」とひっくりかえす)。しかし中国語はあくまでも中国語であって日本語ではない。その差は具体的な説明のなかで明らかにしていくほかないが、ここではさしあたり、次の例をあげるにとどめる。

例 1. 事物=物質

事物=物質運動

事物=物質運動形式

つまり、事物とは物質であり、物質の運動であり、物質の運動の形式でもある。

例 2. 事物=運動あるいは発展

事物=発展過程

事物=発展過程の各段階

例 3. 過程は段階として現われる。全過程・長過程は過程からなる。この場合、過程=全過程・長過程、段階=過程である。

以上の例から事物、過程、段階という概念がそれぞれ〈关系的〉な概念であることを読みとってほしい。中国語の一語一語が〈关系的〉性格を強くもつのであり、この〈关系的〉視点を見失い、〈実体的〉にのみ把握すると、『矛盾論』の論理は全くわからなくなる。わかりやすくいえば中国語の一語一語は基石の一つ一つと同じように、置かれたその位置によってその意味が異なるのだ。中国語学の専門家でない筆者にとって、このような中国語の初歩の解説じみた話は苦手だが、『矛盾論』の理解のためには不可欠である。既訳の訳者たちは専門家であるはずなのにこの点がきわめてあいまいであり、いたるところで混乱をさらけ出している。

さて、以上の点には特に留意して『矛盾論』の論理を追求していくことにしよう。

毛沢東はまず矛盾の普遍性・絶対性を論じ、二つの意義を説明する。

「矛盾存在於一切事物的發展過程中……每一事物的發展過程中存在着自始至終的矛盾運動」

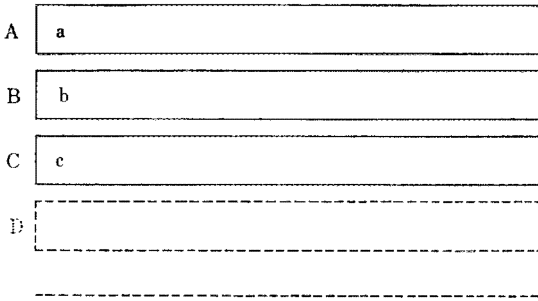
(甲種本, 75ページ)。

事物を大文字、矛盾を小文字で表現すれば、前者は第2図のように図示しうる。

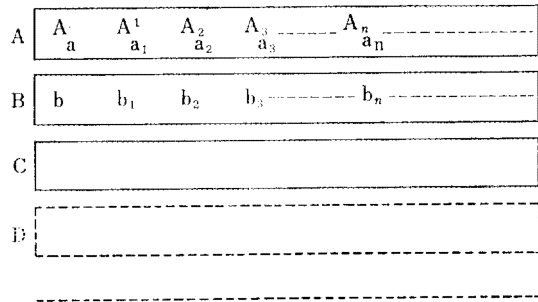
後者は同じく第3図のように図示しうる。

第2, 3図に若干の説明を加えておく。「一切事物」(すべてのあるいはあらゆる事物)というとき、事物A・B・C・D……のなかに矛盾a・b・c・d……が想定されている。次に「每一事物」(一つ

第 2 図



第 3 図



一つの事物) といふとき、たとえば事物Aが $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3 \cdots A_n \cdots$ と発展し、それぞれ $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdots a_n \cdots$ なる矛盾をもつことが想定されている。

したがって、矛盾の普遍性は、 $a \cdot b \cdot c \cdot d \cdots$ なる系列と、 $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdots a_n \cdots$ の系列の二つの意味で使われる。

次に矛盾の特殊性・相対性であるが、第3図は実はすでに特殊性にたち入っている。 $a \cdot b \cdot c \cdot d \cdots$ をその〈個別性〉の視点から把握したとき、それは矛盾の特殊性であるし、また $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdots a_n \cdots$ は a としての側面からとらえれば普遍性であるが、suffix の側面からとらえれば特殊性にはかならないのである。

根本矛盾とは第3図において a であり、この a が過程の本質を規定する。順序が逆になったが、 $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3 \cdots A_n \cdots$ を全体として把握したとき、それが過程であり、 A_n を suffix の側面から、

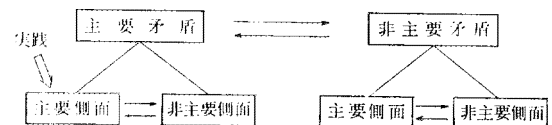
つまり〈個別性〉においてとらえたときそれぞれが段階である。

過程と段階との関係についていえば、 A_n を段階でなく過程ととらえる視点もありうる。この場合、前にふれたように A は全過程となる。同じことは普遍性と特殊性との関係についてもいえる。毛沢東は例をあげていう。資本主義制度における生産の社会化と生産手段の私的所有制との矛盾は、〈資本主義という視点〉からいえば矛盾の普遍性であるが（つまり資本主義各国が共有するものだから。毛沢東の説明はこれだけだが、さらにいえば一つの資本主義をとりあげても、重商主義・自由主義・帝国主義という各発展段階に共通する矛盾である）、〈階級社会一般という視点〉からいえば矛盾の特殊性である。つまり、この矛盾は階級社会一般における生産力と生産関係との矛盾の資本主義社会における現象形態にすぎないのだから。毛沢東は別に〈視点〉ということばを使っているわけではないが、〈視点〉〈視点の移動〉を自覚的に追求することによってこそ、毛沢東の論理が的確に把握しうることになる。

さて、以上の予備的考察を行なうことによって主要矛盾・主要矛盾の側面の構造を理解する準備ができた。

先の第3図から a_n をとりだし、その構造をみると第4図のごとくである。

第 4 図



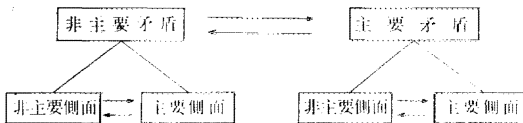
きわめて単純な図である。ところが、奇妙なことにこの図がこのように描かれたことはなかったのである（中国語の誤読と毛沢東の論理の誤解に妨げられた結果として）。

毛沢東はこの図を想定することによって、次のように考えた（とわれわれは考える）。「事物の性質は、主として、支配的地位を占める矛盾の主要な側面によって規定される」。ここで「支配的地位を占める矛盾」とはすでにふれたように「主要な矛盾」をいいかえたもの、あるいは内容をより具体的に説明したものである。さてわれわれは、この文章を次のように読まなければならない。

「事物の性質を変革するためには、主要矛盾の主要側面を把握して、それを実践の対象としなければならない」と。

実践を経て、矛盾の構造は次のように変化する。

第 5 図

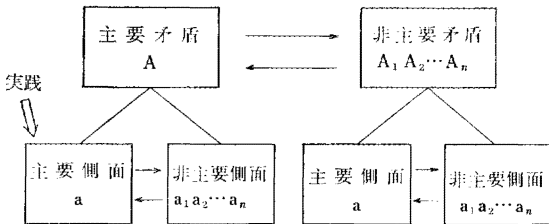


毛沢東の『矛盾論』の基本構造は以上で尽きる。

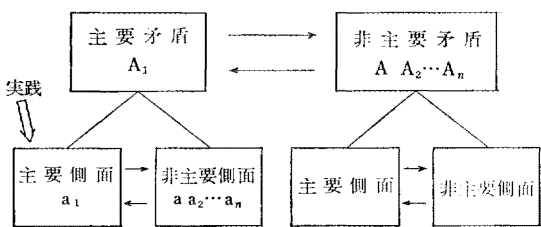
しかし、非主要矛盾・非主要側面は一般には複数であるから、この点をわかりやすく表現するためには第6図が有効であろう。

矛盾を大文字、矛盾の側面を小文字で表現する（第3図のアルファベットとは関係ない。念のため）。

第 6 図



第 7 図



念のためにつけ加えておけば、第5図は次のように表示できる。

いま第5図を一般化したのが第7図だと書いたが実は両者は全く別の図である。第5図は第4図の結果図であるのに対し、第7図は第6図の結果図ではなく、第6図の実践後の矛盾の構造変化を次の実践のためにとらえなおした〈実践のための認識図〉なのである。第5図は第4図の裏返しにほかならず、第4図自体のなかに第5図は含まれている。「鑽牛犄角眼兒 (zuān niújǎoyǎor)」（つまりなことをいつまでも追求する、の意）というなかれ。まさにこの「牛犄角眼兒」のなかにこそ、毛沢東の論理の秘密が隠されているのだから。しかし、この問題は後に追求することにして先を急ぐことにする。

『矛盾論』の基本的な論理構造を以上のごとく把握することによって何が明らかになるか。

主要矛盾の両側面の相互転化、非主要矛盾の両側面の相互転化、主要矛盾と非主要矛盾の相互転化、この三つの相互転化の相互連関が完全に解けた。こう書いてみると、全くアツリマエの話であって、いわばコロンブスの卵ほどの「発見」でもないのだが、実はこの点が不明確だったからこそ、かつての「矛盾論誤識論争」は不毛だったのではないか。

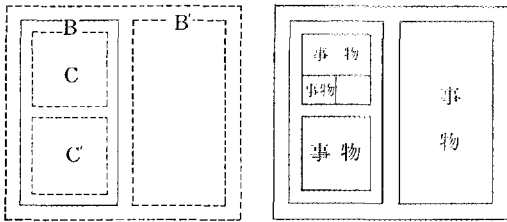
この図式の効用は上に述べた点に尽きるわけではない。矛盾の構造の全体的な把握を通じてまず第1に事物と矛盾との関係、毛沢東のいう事物とは何かが解明されるのである。

元来、ホコとタテとの〈関係〉であって、カタチをもたない矛盾についてさえ図示しようとすれば、形をもつ事物の図を描くことの容易さはいうまでもない。

毛沢東はいう。「事物の内部から・ある事物の他

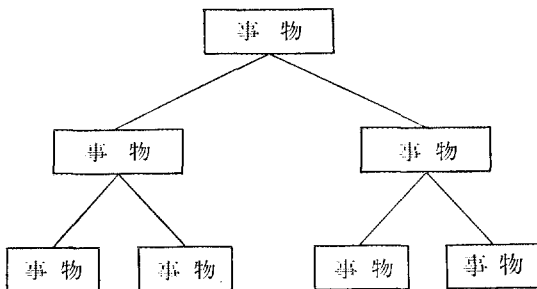
の事物に対する関係から事物の発展を研究する／事物の発展を、事物内部の必然的自已運動であり、一つ一つの事物の運動はみなそれを取りまく他の事物と相互に関係・影響しあっている、とみる／事物の発展の根本原因は事物の外部ではなく内部に、つまり事物内部の矛盾性にある。この文は第8図のように図示しうる。

A 第 8 図



若干の説明を加える。事物Bを研究するには事物Bの内部（つまりC・C'の側面）および事物Bの外部（つまり事物B'との関係）の双方から観察しなければならない。この場合、C・C'の矛盾性が事物の発展の根本原因である。ここでB'が事物Bにとって「他の事物」であることは明らかだが、事物Aを想定すればB・B'は事物ではなく、事物AにとってA内部の矛盾性になる。以上の考察を一般化すれば、第8図が描けるであろう。こうして事物の内部・外部が相対的な関係にすぎず、内部と外部とのカベは消え失せることになる。毛沢東のいう事物という概念を以上のごとく把握することが『矛盾論』理解にとって決定的なカギである。

第 9 図

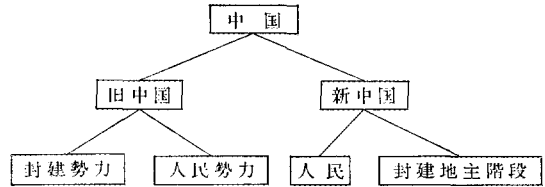


さて第8図は第9図のように展開しうる。

第9図は事物の構造を描いた図であるが、これは先に描いた矛盾の構造図と全く同じものであることはいまや明らかであろう。こうして、事物の側面＝矛盾の側面、事物＝矛盾となった。

毛沢東の示した具体的な例で考えてみよう。

第 10 図



第10図で中国を事物としてとらえたとき、旧中国・新中国はそれぞれ事物の側面であり、旧中国を事物としてとらえたとき、封建勢力・人民勢力が事物の側面となる。以下同様に、中国を事物の側面としてとらえることができるし（もう一つの側面として帝国主義を想定し、帝国主義戦争を事物とみよ）封建勢力を事物とみることができる（この場合、たとえば地主・買弁ブルジョアジーなどがそれぞれ側面となる）。

第10図についてもう一つの説明を加えておきたい。旧中国とは国民党支配地区であり、新中国とは解放区であるから、第10図は支配階級としての封建勢力を被支配階級としての人民勢力が打倒することこそ、国民党支配地区を小さくし、解放区を拡大することを意味する、という人民戦争の論理を説明する図なのであり、同時に歴史的にいえば、旧中国がどのようにして新中国に生まれかわったかを説明する図でもあるのだ。

さて、以上を総括すれば、事物を第9図のごとく把握することによって、この事物＝矛盾のモデルは自然・社会（歴史）はもとより、人間の思惟（毛沢東はこれを「思想(sìxiǎng)」「概念(gàiniàn)」としてとらえる）をも含めたすべての事物に適用可

能となる、というのが『矛盾論』の基本的な主張である。

モデルの効用の第2は、矛盾の側面とは何かが明らかになることである。『矛盾論』では、矛盾の諸側面（「各方面・諸方面」）、矛盾の両側面（「両方面・双方面」）という概念がくり返し登場するが、これまで両者の関係が明快に説けなかった（たとえば、新島淳良『毛沢東の思想』第2篇第3章をみよ。勁草書房、1968年）。ところが、第6図によってこのアポリア（というほどでもなかったのだが）は一挙に氷解する。つまり矛盾の諸側面とは、主要・非主要の区別とは無関係に矛盾の諸側面をありのままにとらえることであり、矛盾の両側面とは、諸側面を主要側面・非主要側面に区別して把握すること、なのである。

第3に、矛盾の諸側面の同一性と闘争性との関係も明確に理解できる。第10図をごらん願いたい。毛沢東によれば同一性には二つの意味がある。第1は両側面の相互依存＝統一のこと。図でいえば、封建勢力と人民勢力、旧中国と新中国とが統一して、それぞれ旧中国、中国を形成していることをさす。同一性の第2の意味は相互転化だが、これは図でいえば、被支配階級である人民勢力が支配者となり、支配階級である封建勢力が被支配者となることである。このときある段階から次の段階へ移行する。毛沢東は相互依存＝統一を不同一性ともよんだが、これが同一性の特殊な形態であることはいうまでもない。したがって、矛盾している両側面の関係は一貫して同一性という概念でとらえることもできるのであるが、同一性とは元来不同一性＝矛盾・対立している状態と相互転化との〈差別性〉を意識した概念であり、相互転化の〈条件性〉に注目している。この意味で同一性は条件的・相対的なものである。

次に闘争性について。上の場合、相互転化のとき、闘争性の存在は明らかであるが、相互依存から相互転化への移行も闘争性によってしか説けない。ところでこの相互依存もその前の相互転化の帰結であることに着目すれば、闘争性は一貫していとみななければならない。逆にいえば、相互依存——相互転化——相互依存の循環を一貫性においてとらえた概念が闘争性なのである。この意味で矛盾の闘争性は無条件的・絶対的である。そして闘争性の特殊な形態が敵対性であり、それ以外の形態が非敵対性ということになる。

最後に両者の関係は、同一性のなかに闘争性があり、相対性のなかに絶対性があり、特殊性のなかに普遍性がある、という有名な規定で尽きる。

以上で「矛盾論の構造」の論理的解明はひとまず終えた。念のために断っておくが、以上の作業は毛沢東の論理を、対象にそくして把握するための作業にすぎないのであって『矛盾論』研究はここから出発するのだ、という点である。

次の課題にとりくむ前に、ここで若干の感想を書きつけておきたい。

竹内好は論文④で書いた。「既訳の訳者はすべてコミニストだが、かれらには毛沢東思想を理解する能力がないし、そればかりでなく、理解しようとする意欲もない、とわたくしは断言したい」。

松村一人は前掲『思想』の論文で書いた。「マルクス主義批判者にたいする無批判的な態度こそ、今日では思想の前進をばばむ最大の要因の一つとなっている」。

その言やよし。しかし、いまやわれわれには既訳の訳者たちの中国語を読む能力、毛沢東の論理をとらえる能力の「水準」が明らかになった、と、いいのであって、われわれはこの事実をしかとみつめるところから出発しなければならない

のである。

なお、先に指摘した誤訳がどこで生まれ、どのように継承されてきたのかは、それ自体興味ある問題だが、ここでは北京外文出版社版の英訳も誤訳であることを指摘するにとどめる。

Selected Works of Mao Tse-tung, Vol. I, (Foreign Language Press, Peking 1965, Second Printing, 1967).

誤訳 1. the principal contradiction and the principal aspect of a contradiction, pp. 311, 331. (2カ所) 下線部は誤訳であり、次のように訳すべきだ。the aspects of the principal contradiction.

誤訳 2. of the principal and non-principal contradictions and of the principal and the non-principal aspects of a contradiction, p 337. 下線部が誤訳であり、次のように訳すべき。of the aspects of the principal and the non-principal contradictions.

誤訳 3. The nature of a thing is determined mainly by the principal aspect of a contradiction, the aspect which has gained the dominant position. which の先行詞は contradiction でなければならぬから、the aspect は不要のはず。また contradiction は限定されるから冠詞は a でなく、the とすべきである。この一文を Stuart R. Schram, *The Political Thought of Mao Tse-tung* は次のように正しく訳している。The quality of a thing is determined mainly by the principal aspect of the contradiction that has taken the dominant position, p 199. もっとも the nature of a thing と the quality of a thing のいずれが「事物的性質」に近いかについての判断はわたくしにはつかない。

なお、Schram の場合も 4 章の標題は、外文出版

社版と同じで誤訳である。もう一つつけ加えておく。竹内好は「取得支配地位的矛盾」を「支配的位置を占めた矛盾」と訳して松村一人から批判されたが、竹内は英訳の「現在完了」を誤読したのではないだろうか。この現在完了はむしろ結果の継続を表わすから「占めている」と訳すべきである。

VI 『矛盾論』の実践的意義

『矛盾論』はいったいなんのために書かれたのか。「教条主義思想」を克服するために、である。中共中央毛沢東選集出版委員会の説明によれば次のとおり。「這篇哲学論文，是毛沢東同志繼《實踐論》之後，為了同一的目的，即為了克服存在於党內的嚴重的教条主義思想而写的」（甲種本，67ページ）。

同委員会の『實踐論』についての注記はより具体的に「同一的目的」を説明しているので、それを見ておこう。

「在我們党内，曾經有一部分教条主義的同志長期拒絕中国革命的經驗，否認“馬克思主義不是教条而是行動的指南”這個真理，而只生吞活剝馬克思主義書籍中的只言片語，去吓唬人們。還有另一部分經驗主義的同志長期拘守於自身的片斷經驗，不了解理論對於革命實踐的重要性，看不見革命的全局，雖然也是辛苦地——但却是盲目地在工作。這兩類同志的錯誤思想，特別是教条主義思想，曾經在一九三一年至一九三四年使得中国革命受了極大的損失，而教条主義者却是披着馬克思主義的外衣迷惑了廣大的同志。毛沢東同志的《實踐論》，是為着用馬克思主義的認識論觀點去揭露党內的教条主義和經驗主義——特別是教条主義這些主觀主義的錯誤而写的」（甲種本，45～46ページ）。

以上の説明から、『實踐論』、『矛盾論』の目的が

「教条主義と経験主義、とりわけ教条主義」の克服にあったことを確認しておかなければならない。教条主義が1931年から34年にかけて大きな害悪を及ぼしたことは歴史の教えるとおりであるが、毛沢東が1937年の時点でこの事実を強調しているのは、過去の誤った経験の総括としてそれが必要であったという理由に基づくだけではなく、まさに1937夏の時点においても、教条主義と経験主義とが依然克服すべき対象であったことを意味している。とすれば、この時点での教条主義・経験主義とは何であったかを明らかにすることこそ、『矛盾論』（『実践論』）の実践的意義を解明することになるであろう。毛沢東の説明をきこう。

「半殖民地的国家如中国，其主要矛盾和非主要矛盾的關係呈現着複雜的情況。／当着帝國主義向這種国家舉行侵略戰爭的時候，這種国家的内部各階級，除開一些叛國分子以外，能够暫時地團結起來舉行民族戰爭去反對帝國主義。這時，帝國主義和這種国家之間的矛盾成為主要的矛盾，而這種国家内部各階級的一切矛盾（包括封建制度和人民大眾之間這個主要矛盾在內），便都暫時地降到次要和服從的地位。中国一八四〇年的鴉片戰爭，一八九四年的中日戰爭，一九〇〇年的義和團戰爭和目前的中日戰爭，都有這種情形。／然而在另一種情形之下，則矛盾的地位起了變化。当着帝國主義不是用戰爭壓迫而是用政治・經濟・文化等比較溫和的形式進行壓迫的時候，半殖民地国家的統治階級就会向帝國主義投降，二者結成同盟，共同壓迫人民大眾。這種時候，人民大眾往往採取国内戰爭的形式，去反對帝國主義和封建階級的同盟，而帝國主義則往往採取間接的方式去援助半殖民地国家的反動派壓迫人民，而不採取直接行動，顯出了内部矛盾的特別尖銳性。中国的辛亥革命戰爭，一九二四年至一九二七年的革命戰爭，一九二七年以後的十年土地

革命戰爭，都有這種情形」（甲種本，96～97ページ）。

やや長い引用になったが、この部分は『矛盾論』のなかで最も重要な個所であるから、ていねいにみておきたい。毛沢東はまず「複雑な情況」を大きく二つに分ける。

第1の情況。帝國主義が侵略戰爭を行なっているとき。人民は「民族戰爭」で帝國主義に反対できる。このとき帝國主義との矛盾が主要矛盾になる。具体的な例をあげれば、(1)アヘン戰爭、(2)中日戰爭（いわゆる「日清戰爭」）(3)義和團戰爭、(4)1937年以來の中日戰爭。

第2の情況。帝國主義が戰爭という形態ではなく、比較のおだやかな形態で抑圧しているとき。人民は「国内戰爭」で帝國主義と封建階級的同盟に反対する。具体的な例をあげれば、(1)辛亥革命戰爭、(2)1924～27年の革命戰爭、(3)1927年以後10年の土地革命戰爭。

二つの情況を区別する基本的なメルクマールは、帝國主義が侵略戰爭を行なっているかどうか、である。「第1の情況」の四つの例はいずれも侵略戰爭の場合である。ここで、四つの例を単に侵略戰爭の例示としてとらえるだけでは実は不十分である。毛沢東は(4)の中日戰爭が「侵略戰爭である」ことを示すために、アヘン戰爭から義和團戰爭までの侵略戰爭の歴史的経験をあげたのだから。つまり辛亥革命以後1936年までは「革命戰爭」が行なわれたのであるが、1937年の時点で4度目の侵略戰爭が始まったというのが毛沢東の判断なのである。したがって従来の「革命戰爭」の戦略から、反侵略戰爭の戦略への転換が必要だというのが毛沢東の政治的・実践的判断であり、これを裏づける論理こそ毛沢東の求めたものであった、とみていい。一言でいえば、従来の国共内戦から抗日統一戦線への戦略の転換を裏付ける論理とし

て「主要な矛盾」なる新しい概念が提起されたのであった。

つまり、中国民族にとって日本帝国主義との矛盾が「主要(な)矛盾」となり、それ以外のすべての矛盾は「主要矛盾」ではなくなったというのが毛沢東の認識であった。歴史を顧みるとき、毛沢東の判断の正しさはおそらく誰の目にも明らかだが、1937年夏の延安では、そして全中国では、情況はどのように認識されていたであろうか。ここでたち入った検討を加える用意はないが、教条主義者・経験主義が情況を毛沢東のごとくとらえなかったであろうことは容易に推察できる。つまり、教条主義者は階級矛盾→国共内戦の論理に固執し、また経験主義者が同じく国共内戦の経験を相対化できず、日本帝国主義を主要な敵と認識しえなかったであろうことはほぼ疑いない(つけ加えておけば、教条主義者たちはかの悪名高き「主要打撃論」を振り回したのかもしれない。この点は今後の研究課題としておきたい)。

情況が以上のごとくであるとすれば、毛沢東の課題は明らかである。「全力をあげて主要矛盾を探し出せ。日本帝国主義との矛盾こそそれだ」というのが毛沢東の主張であった、といていい。この意味では、『矛盾論』全体が、まさにこの2行の主張のために書かれたといっても決していいすぎではないのである。逆にいえば、この2行の主張を論理的に展開するためには『矛盾論』全体が必要だった。われわれは『矛盾論』の実践的意義を以上の点に見出したいと考える。われわれのこのような主張は『矛盾論』の意義の矮小化では決してない。日本帝国主義を「主要矛盾」ととらえきれるかどうかこそ中国革命の成否がかかっていたのであって、この意義はどんなに強調しても強調しすぎることはない。われわれはま

た『矛盾論』の哲学的意義を矮小化するつもりもない。毛沢東の哲学はこのような具体的・現実的課題を解決しえたところでこそ、普遍性・世界的意義を主張しうるのであって、毛沢東的にいえば特殊性・個性のなかにこそ普遍性・共通性が存在しているのである。

VII 『矛盾論』における「上部構造の反作用」論について

『矛盾論』は矛盾の構造を明らかにし、主要矛盾の主要側面を実践の対象とすれば、事物の性質が変化する、と説いた。したがって、主要矛盾およびその主要な側面を「探し出す」ことが必要である。つまり主要矛盾を〈いかに認識するか〉がカギである。ところが、毛沢東は主要矛盾を認識する方法を説いてはいないのである。毛沢東自身が主要矛盾をどのようにして発見したかは毛沢東のあげた事例からうかがうことができる。しかし、毛沢東は主要矛盾を認識する方法を〈方法として〉は説いていない。正確に言えば、われわれの問いに対して毛沢東は実はすでに答えており、その答とは、「実践——認識——再実践——再認識」という「認識論」(=『実践論』)である。主要矛盾を認識する方法=認識論を上指ししたような形でしか毛沢東は規定しないのであるが、われわれはここに『矛盾論』の、より一般的には「毛沢東思想」の意義と限界を見出すことができると考える。

具体的な例で考えてみよう。『矛盾論』第4章に曰く――。

(1) 有人覺得有些矛盾并不是這樣。例如，生產力和生產關係的矛盾，生產力是主要的；理論和實踐的矛盾，實踐是主要的；經濟基礎和上層建築的矛盾，經濟基礎是主要的；它們的地位并不互相轉化。這是機械唯物論的見解，不是弁証唯物論的見解。

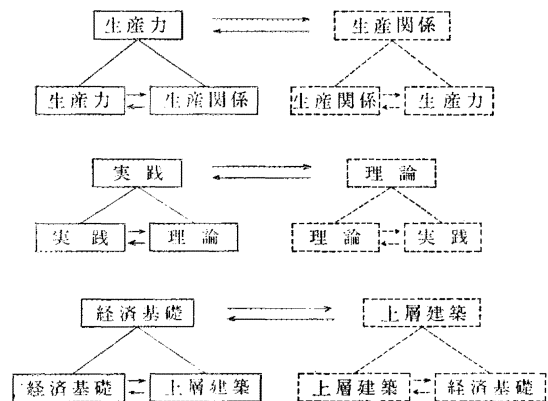
(2) 誠然、生産力・実践・経済基礎、一般地表現為主要的決定的作用(A)，誰不承認這一点，誰就不是唯物論者。然而，生産關係・理論・上層建築這些方面，在一定条件之下，又轉過來表現其為主要的決定的作用(B)，這也是必須承認的。

(3) 当着不變更生産關係，生産力就不能發展的時候(C)，生産關係的變更就起了主要的決定的作用。当着如同列寧所說“沒有革命的理論，就不会有革命的運動”的時候(D)，革命理論的創立和提唱就起了主要的決定的作用。当着某一件事件(任何事情都是一樣)要做，但是還沒有方針・方法・計畫或政策的時候(D')，確定方針・方法・計畫或政策，也就是主要的決定的東西。当着政治文化等上層建築阻碍着經濟基礎的發展的時候(E)，對於政治上和文化上的革新就成為主要的決定的東西了。我們這樣說，是否違反了唯物論呢？沒有。因為我們承認總的歷史發展中是物質的東西決定精神的東西，是社会的存在決定社会的意識；但是同時又承認而且必須承認精神的東西的反作用，社会意識對於社会存在的反作用，上層建築對於經濟基礎的反作用。這不是違反唯物論，正是避免了機械唯物論，堅持了弁証唯物論(甲種本，102~103ページ段落および符号は矢吹)。

(1)は毛沢東の批判する機械的唯物論である。(2)、(3)が毛沢東の積極的な主張であるが、ここで(2)、(3)の論理に注目しなければならない。まず(2)において、AとBを結ぶ論理は何か。ここで「在一定条件之下」が重要であることはいうまでもない。なぜなら、このときこそ、「主要的決定的作用」の主体と客体とが転倒するのであるから。とすれば、毛沢東のいう「一定の条件」とは何かが問われなければならない。奇妙なことに、毛沢東の説明は(3)のC・D・Eだけである。C・D・Eは「一定の条件」を論理的に解明したといえるであろうか。C・D・Eは明らかに(1)の機械的転倒

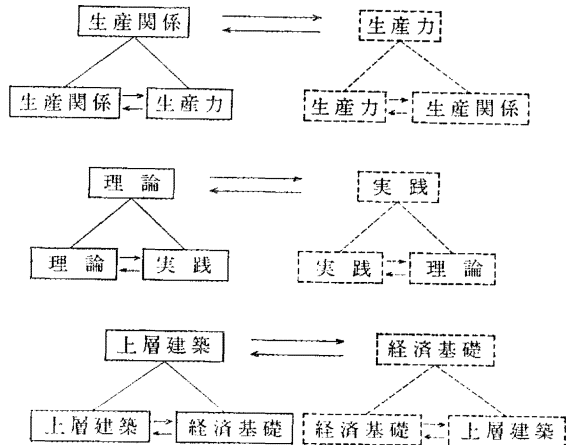
にすぎない。つまり、「一定の条件」を論理的に明らかにしたものではない。問題はC・D・Eをいかに認識するかであり、いつ、いかなる条件のもとでC・D・Eであるのかをわれわれは認識しなければならないのだ。ここで毛沢東の論理をわれわれの先のモデルによって整理しておく。Aは第11図のように図示する。

第 11 図



Bは第12図のように図示する。

第 12 図



第11, 12図において実線部分は毛沢東が直接言及したところであり、点線部分は implicit に想定されているものであることはもはや説明を要しないであろう。BがAの単なる裏返し(論理の転倒)

にすぎないことも一目瞭然であろう。

さて以上から明らかなように、『矛盾論』における「一定の条件」のもとでの「上部構造の反作用論」、「生産関係の反作用論」とは、論理のレベルでは「機械的唯物論」の「機械的転倒」あるいは「折衷論」あるいは「二元論」にすぎない。「一定の条件」の認識方法を解明しないかぎり、直ちに唯物史観の発展であるとはいいがたい。このかぎりでは、世の多くの毛沢東批判家たちの見解とわれわれの理解は同じである。だが、かれらとわれわれとの違いは、ここで立ち止まるのか、それともここから出発するのか、にある。

『矛盾論』から論理そのものを取り出すとき無内容・無規定的となることは上にみたとおりであるが、これはいったい何を意味するのか。ここで『矛盾論』がいかなる状況のもので書かれたのかをもう一度確認しておく必要がある。すでにのべたように、毛沢東の論理は教条主義＝機械的唯物論を克服するために登場したものであり、教条主義の存在を前提してはじめて存在理由をもつ。教条主義者は生産力の発展が生産関係の変革、つまり革命をもたらすと主張し、下部構造の発展が社会主義イデオロギーを生み出す、と主張した。この教条主義の論理の帰結は革命の否定であることに注目せよ（われわれ自身の苦い経験に即していえば、かつての「生産力論」者の主張を想起せよ）。毛沢東はこの主張を完全に転倒させた。「一定の条件」をつけて。この場合、「一定の条件」とは中国の当時の状況においては、の意であり、けっきょく、毛沢東の主張に別の表現を与えるとすれば、「革命的理論に基づく革命的実践を」ということになるのであって、それ以上でも以下でもない。この意味では、一見同義反復のごとき毛沢東の論理こそ、当時の中国の具体的状況のもとでは、まさに革命

的意義をもちえたのであって、毛沢東の論理は具体的・歴史的現実から切り離すとき「ヌケ殻」だけになるという独特の性格をもっているのである。この特有の性質が何に起因するのかについてのたち入った検討を加える用意はないが、この点を見失うとき、『矛盾論』の意義がほとんどわからなくなるであろう、ということだけはたしかなのである。

VIII 『矛盾論』（より一般的には「毛沢東思想」）の意義と限界

「毛沢東思想」は特異な構造をもつイデオロギーである。その内的構造を『矛盾論』に即して若干の検討を行なったわけであるが、そこから論理自体を取り出すとき、無内容・無規定的たらざるをえないことはすでに指摘した。一方、われわれはまた次の事実にも注目しなければならない。すなわち、中国人民はこの「毛沢東思想」によってみずからを武装し、新民主主義革命を成功させ、さらに社会主義への道を、マルクス主義の原理をほぼ逸脱することなく着実な歩みを続けているという現実、がそれである。

中国革命が成功したのは、むろん変革の主体と対象を正しく把握したからであろうことは疑いない。問題は変革の主体と対象の〈認識方法〉にあるのではないか。それはあえていえばすぐれて中国的なものである。革命の成功はさしあたり中国人民の理論と実践の正しさを証明しているといっているのであるが、その理論は特異な内的構造をもつ理論であり、その理論を中国の具体的・歴史的現実から抽象して一般的理論とするとき（普遍性を主張するとき）、直ちに重大な困難に直面するのである（たとえば「上部構造の反作用」論のごとく）。

以上の事実は、われわれのことばで表現すれば

次のごとくなる。中国革命は〈実践的には正しく解決されたが、理論的には依然未解決である〉。いかえれば、中国革命の理論＝「毛沢東思想」とは〈実践的理論〉であり、われわれの課題はこれを〈理論的理論〉として整序することである。この手続きによってのみ、毛沢東思想の特殊性と普遍性をとらえることができる。われわれは考える。

理論的理論として把握し直し、中国革命の理論的解決をはかる、というのはたとえば次のようなことである。毛沢東は一方では中国人民の敵が帝国主義と封建主義であるといひ（つまり〈反帝+反封建〉）、他方では、帝国主義と封建主義との同盟を強調する（このときは〈反帝＝反封建〉）。いずれにせよ、帝国主義なり封建主義は矛盾論的＝哲学的に把握されているのであって社会科学的分析とはいいがたい。われわれの課題は帝国主義と封建主義の関係を、つまり半植民地・半封建社会を社会科学的に分析することである。この場合、われわれは「唯物弁証法」（その有力な成果としての『実践論・矛盾論』）に直接頼るわけにはいかない。であって唯物弁証法の社会＝歴史への具体的適用の成果の蓄積としての〈社会科学の方法〉を用いるほかはない。つまり、〈方法としての社会科学〉の確立は、唯物弁証法の哲学的死を意味するのである。あたかも近代における自然科学の成立が自然哲学の死を意味したごとく――。

毛沢東は哲学について次のように述べている。

「什么是知識？ 自從有階級的社会存在以来，世界上的知識只有兩門，一門叫做生產鬭争知識，一門叫做階級鬭争知識。自然科学・社会科学，就是這兩門知識的結晶，哲学則是關於自然知識和社会知識的概括和總結。此外還有什麼知識呢？沒有了」（一卷本，773～774ページ）。

哲学を自然科学と社会科学の概括であり総括であるとする主張に対してはさしあたり次の批判が有効であろう。「諸科学の成果の提示する客観世界の全関連こそ、まさに唯物論的世界観の具体的内容をなすものであり、それ自体科学的成果以外のものではないのです。哲学は科学と区別されたものとしては存在しえなくなり、科学自身のうちに、これまで哲学の果たしてきた課題はすべてこたえられることになるというわけです」（降旗節雄『歴史と主体性』、青木書店、1969年、103ページ）。

毛沢東はまた『矛盾論』のなかで、「事物の矛盾の法則、対立統一の法則が唯物弁証法の最も根本的な法則である」と述べているが、これに対しては故加藤正の次の主張（批判）がそのままあてはまるであろう。事物の矛盾の法則、対立統一の法則というのは、「単なる総括や一般化の成果でなく、現実的なあとを少しも残さないように抽象化してしまった運動形式の規定」であり、「思考過程の一側面、現実世界の運動との同一性という面で抽象された思考法則にすぎない」それは「いわば弁証法をかりに形式論理的に説明してみせたにすぎない。個々の一般法則を個々の事例で証明することで問題はつきる」、「エンゲルスが世界の一般法則の形における弁証法を哲学の対象とよばなかったわけもこれからわかる」（以上、降旗節雄，104ページから再引）。

こうして以上の二つの意味では哲学はその存在理由を失う。とすれば、マルクス主義哲学の固有の課題として残るものは何か。社会科学によって明らかにされる理論を根拠とした人間の社会的実践における主体の構造である。いかえれば理論＝科学と社会的実践とをむすぶ人間の主体性の問題こそマルクス主義哲学に固有の課題として、最後に残る問題である。この難問は後の課題として

残すことにするほかないが、ここで次の点だけは確認しておかなければならない。すなわち、毛沢東のいう上部構造の反作用論にせよ、生産関係の反作用論にせよ、いずれも、理論と実践との関係の問題として解くほかないのであって、これこそが機械的唯物論を克服する唯一の道だ、ということこれである。

XI 根本矛盾・主要矛盾・基本矛盾 とは何か

この三つの概念については、これまでさまざまな解釈が行なわれてきたが、それらはいずれもきわめて不十分なものにすぎなかった。

まず松村一人の「解説」からみていくことにしよう。

ここで、よく提出される問題として、一言説明しておいた方がいいと思われるのは、「主要な矛盾」と「根本的な矛盾」および「基本的な矛盾」という概念との関係である。詳しく説明する紙数がないので、わたしの結論だけを言うと、この三つはいずれもまず第一に「支配的位置を占める矛盾」という同一の内容をもって用いられており、第二には、根本的あるいは基本的と主要的とが並べて用いられるときには、前者が「過程」の全体について使われ、後者が「過程」の段階について使われている。だから必要なことは、主要とか基本とか言われているばあい、この言葉にのみとらわれず、それが「過程」について言われているのか、「段階」について言われているのかを知ることである。そうでないと、毛沢東のその他の諸論文には、あるところで主要と言われている矛盾が他のところでは基本と言われたり、その逆であったりする理由がわからず、とまどってしまうことがある

(この点で読みくらべてみるべき諸論文は、「抗日の時期における中国共産堂の任務」1937年、「中国革命と中国共産党」1939年、「第二次反共運動のたかまりの撃退についての総括」1941年である——岩波文庫版の「解説」、106～107ページ)。

松村の上の説明が「著者の意志で絶版」とされたたかつての『弁証法の発展』(岩波新書、1953年5月、第1刷、いまわたくしの手もとにあるのは1961年6月の第14刷)と比べて若干改善されたことはたしかであるが、その説明は依然としてきわめて不十分なものである。

松村の欠陥としさしあたり次の2点をあげることができる。第1は、「根本的あるいは基本的」という表現。後にくわしくふれるが、毛沢東は根本矛盾と基本矛盾とを区別しているが松村にはこの区別が理解できていない。第2に根本矛盾(基本矛盾ではない)が「過程の全体」について使われ、主要矛盾が「過程の段階」について使われるという解釈はこのかぎりでは正しいが、肝心の「過程」と「段階」との区別が明確に把握されていない。

第2の問題を先に片づけておこう。松村は別の個所で「大きな段階とも呼ぶべき『過程』」「この『過程』のなかの『段階』」と書いているが(「解説」、104ページ)、この説明が松村の限界を示している。つまりここでは「段階」は「過程」と同じく〈長さ〉としてしか把握されず、両者の差は〈長さ〉のちがいとしてか理解されていない。われわれの主張は次のとおり。根本矛盾とは、事物の発展過程を〈発展過程に即して時系列的に〉把握したときの概念であり、〈過程の視点〉からの把握である。主要矛盾とは、事物の発展過程を〈発展過程の段階に着目して横断的に〉把握したときの概念であり、〈段階の視点〉からの把握である。したがって、「過程」と「段階」との差は単に〈長さ〉の

差にとどまるものではなく、前者が〈タテの系列〉であるとすれば、後者は〈ヨコの系列〉であり、両者は矛盾把握の〈視点〉が全く異なるのである。この区別を松村は、ひとり松村だけではなく従来のほとんどすべての論者がとらえきっていない。その結果、根本矛盾たる「ある実体」と主要矛盾たる「ある実体」とが、〈実体として同じもの〉という判断から、「それは（根本矛盾を指す——矢吹）この過程の主要矛盾である」（松村『弁証法の発展』、89ページ、傍点は松村）といったたぐいのタワゴトをくり返しているのである。すでにのべたところから明らかなように、そもそも「過程の主要矛盾」なるものはありえないのだ（もっとも、ここでいう「過程」が「全過程」「長過程」との関係において使われ、したがって「過程」に対する「段階」を意味するならば事情は別である）。以上のごとく、矛盾を〈実体的〉に把握すべきときに（たとえば「矛盾起主導作用」の訳）、それに失敗した論者たちは、矛盾を〈関係的〉に把握すべきときに、実体を想定して、救いがたい混乱に陥っている。

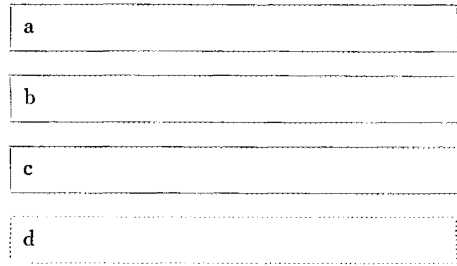
ここで既訳の訳者たちが「過程」「段階」の意義を正確に把握できなかった例を一つあげておく。

不但要研究每一個大系統的物質運動形式的特殊的矛盾性及其所規定的本質，而且要研究每一個物質運動形式在其發展長途中的每一個過程的特殊的矛盾及其本質。一切運動形式的每一個實在的非臆造的發展過程內，都是不同質的。（甲種本，82ページ）。

上の引用の段階では、毛沢東はまだ明示的には「過程」までしか説明しておらず「階段」にはたち入っていないのであるが、引用の中の二つの「過程」は論理的には「階段」の説明であることに注目せよ。つまり「長途」とは「長過程」の意であり、二つの「過程」という中国語はともに「階段」の

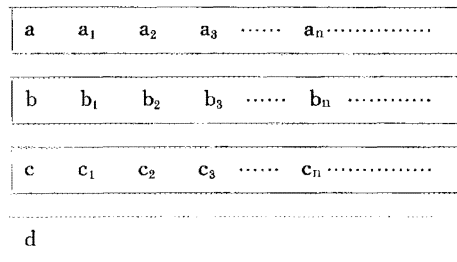
意なのである。したがって後半の文章を図示すれば次のごとくとなる。まず「一切運動形式的……發展過程内」というとき第13図が描ける。

第 13 図



この図にさらに「每一個……發展過程内」が重なるから、図は第14図のとおり。

第 14 図



第14図から明らかなように、「都是不同質的」（みな異質である）というとき、異質性は $a \cdot b \cdot c \cdot d \dots$ の系列だけではなく、 $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdot a_4 \dots$ の系列も含むのである。

さてかつての「誤訳論争」を顧みて明らかなことは、竹内好は第13図しか想定できなかった。次の訳文をみよ。「すべての運動形態の、臆測でない実際の發展過程内は、すべて異質である」（竹内訳、207ページ）。この点に関するかぎり、松村一人の批判（『思想』、1962年7月、84ページ）は正しい。松村は「『諸過程』（たとえば、封建制、資本主義、等々）の系列」と理解しているのであるから。ところが、松村の理解は第14図とは異なるのであり、竹

内とは反対に $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \dots$ の系列を想定するだけで $a \cdot b \cdot c \dots$ の系列は見失っている。次の文章がその証拠である。「小さいことから先に言えば、『それぞれの物質の運動形態』という竹内好訳は、『物質のそれぞれの運動形態』という既訳の方が誤解のおそれがない」（松村『思想』, 84ページ）。

「既訳の方が誤解のおそれがない」どころか既訳(岩波文庫訳等)は明白な誤訳である。なぜなら、「それぞれの」はさしあたりまず「物質」にかかるのであり、「物質」が複数だからこそ、「運動形態」も複数になるのだから(論理上・意味上)。「每一個物質運動形式」「各種物質運動形式」と「物質的每一种運動形式」とを毛沢東は区別しているのであるが、前者を後者のごとく訳してしまうのが、松村(竹内実)訳なのである。このようにみえてくると、竹内好・松村一人の主張がともに限界をもつものであり、五十歩百歩の論争であることが明らかになる。松村は「過程」と「段階」が「関係的に規定されている」点に注意しないと、「特に『過程』の意義が見すごされる」などおしゃべりをくり返しているが、その意義を見すごしているのは、ほかでもない当人なのだ。毛沢東の先の引用のなかの「過程」が論理的には「段階」を意味することを見失ったために、松村の理解する「過程」と「段階」の差は、たかだか〈長さ〉の差に歪小化されてしまった。

さてここで第1の問題に戻る。「過程」と「段階」との関係が明らかになったいま、根本矛盾・主要矛盾はそれぞれ〈過程の視点〉〈段階の視点〉からの把握であることは確認できたことになるが、この二つの矛盾と基本矛盾との関係はどうであるか。

毛沢東の基本矛盾ということばの使い方をみてみよう。

例 1. 中国很久以来就是处在两种激烈的^{基本的}矛盾中——帝国主义和中国之间的^{矛盾}，封建制度和人民大众之间的^{矛盾}。「中国共产党在抗日时期的任务」(1937年5月，一卷本, 232ページ)。

例 2. 马克思把这一法则应用到资本主义社会^{经济}结构的研究的时候，他看出这一社会的^{基本}矛盾在于生产的^{社会性}和占有制的^{私人性}之间的^{矛盾} (『矛盾論』, 甲種本, 92ページ)。

例 3. 帝国主义和中华民族的^{矛盾}，封建主义和人民大众的^{矛盾}，这些就是近代中国社会的^{主要的}矛盾。当然还有别的^{矛盾}，例如资产阶级和无产阶级^的矛盾，反动统治阶级内部的^{矛盾}。而帝国主义和中华民族的^{矛盾}，乃是各种^{矛盾}中的^{最主要的}矛盾。这些矛盾的斗争及其尖锐化，就不能造成日益发展的^{革命}运动。伟大的近代和现代的中国^{革命}，是在这些^{基本}矛盾的^{基础}之上发生和发展起来的。「中国革命和中国共产党」(1939年12月，一卷本, 594ページ)。

例 4. 在中国两大^{矛盾}中间，中日民族间的^{矛盾}依然是^{基本的}，国内阶级间的^{矛盾}依然处在^{从属的}地位。／这些同志的^{错误}，在于忘记了^{民族}矛盾是^{基本}矛盾这一点。／有些同志由于中日^{矛盾}是^{基本}矛盾这一点发生^{动摇}，并因此对国内^{阶级}关系作了^{错误的}估计，因而对党的^{政策}也有时发生^{动摇}。「关于打退第二次反共高潮的总结」(1941年5月，一卷本, 739, 740, 742ページ)。

例2の『矛盾論』の場合からみていく。『矛盾論』のなかで基本矛盾が登場するのはここで1回かぎりである。ここでは「資本主義の社会^{经济}构造」を問題にしてその基本矛盾が生産の^{社会性}と私人的^{所有制}であると述べている。この例が端的に示すように、一定の^{构造}を想定して、^{静態的}の視点から^{矛盾}を把握するとき、それを^{基本}矛盾とよぶ。つまり、^{基本}矛盾とは、^{矛盾}の〈^{构造的}・^{静態的}〉

視点〉からの把握にほかならない。例1は中国の近代社会の構造を想定して帝国主義・封建主義との矛盾が基本矛盾だとしている。例3も例1と同じである。

例4は中日戦争を一つの構造として把握しているから、国民党軍の2度にわたる共産党軍への攻撃にもかかわらず、1927年のクーデタとは違って、中日民族間の矛盾が依然基本矛盾だとくり返している。基本矛盾をわれわれのように理解してこそ毛沢東の例文を論理的に説明しうることになる。なお、根本矛盾・主要矛盾と基本矛盾との関係は前者が「情況(qíngkuàng)」になじむのに対し、後者が「状況(zhuàngkuàng)」になじむ概念だといっている。前者が主体的把握であるとすれば、後者は客観描写的把握である。

松村はすでに指摘したように根本矛盾と基本矛盾とを区別しえなかったのであるが、この欠陥は松村だけのものではない。新日本出版社版の邦訳は例3の「主要的矛盾」を「基本的な矛盾」としているが(第2巻, 387ページ)、新島淳良によれば、この改訳は「中国側の意向」によるものだという(『毛沢東の哲学』158ページ)。この改訳がたとえ「毛沢東の意向」によるものであるとしても、われわれは改訳を支持することはできない。改訳は「最主要的矛盾」を「もっとも主要なもの」としているが、改訳によれば、二つの「基本的な矛盾」のうちで「もっとも主要なもの」ということになり、基本矛盾と主要矛盾という概念上の区別は全くあいまいにならざるをえない。この翻訳が行なわれたのは、1965年、北京においてであるとのことだが、その後中国で大量に発行された中国語版選集も「主要的矛盾」を「基本(的)矛盾」と改めてはいないことからみても、邦訳への改訳が「毛沢東の意向」によるものでないことはほぼ推察しうる

のであるが、われわれはこの翻訳の当事者たちに強い不満を表明せざるをえない。かれら(日本側・中国側の双方)は、基本矛盾と主要矛盾とがいかに異なる概念であるかについて無知であるためこのような改ザンを行なうのだ、と考えられるから(現行の外文出版社版も事情は同じである。第2巻, 422ページ、また例4の「基本的」「基本矛盾」を外文出版社版は、いずれも「主なもの」と訳しているが——第2巻, 647, 648, 651ページ——この訳もまた支持しがたいと考える)。さて原文に戻ろう。原文の筆者は、まず近代中国社会から主要矛盾として二つをあげ、そのうちの一つが「最も主要な矛盾」だという。したがって「最主要的矛盾」こそ『矛盾論』でいう「主要矛盾」のことである。この個所はいちおう以上のように説明しうる。しかし、やはり不自然さが残る。主要矛盾を二つあげ、それをもう一つにしぼるといふやり方は果たして毛沢東のものであろうか。以下は推測にすぎないがこの不自然さは「原文の筆者」が毛沢東ではなく、「其他幾個同志」(同論文への編集者注)であることに求められるのではないか。むろん毛沢東は「其他幾個同志」の書いた草稿に手を入れているにはちがいないが、草稿を生かそうとして不自然になったというのが、われわれの推測である。

推測はわれわれとしてはできるだけ避けたいところであるが、あえてたち入ったのは実は新島淳良の所説(これまた松村に劣らず奇怪な議論である)がこの点にかかわるからである。新島の『毛沢東の哲学』『毛沢東の思想』は新島の表現を借りれば(『哲学』146ページ)、「愚にもつかないことを述べている」「典型的な悪しき訓話学であり、卑俗な解釈学」「このおそまつな解釈」ということになるのではないかと思われるが、実際にこうした批評が正鵠を射ているかどうかは読者の判断に委ね

ることにして以下具体的に検討していくことにしよう。手始めは『毛沢東の哲学』第6章「主要矛盾」は果たして一つか、である。

新島は「主要矛盾複数説」を唱えているのであるがその主張が誤りであるばかりでなく、その行論にもかなり疑問が多い。新島はまず次の1節を引用する。

当着帝國主義向這種國家舉行侵略戰爭的時候，這種國家的內部各階級，除開一些叛國分子以外，能夠暫時地團結起來舉行民族戰爭去反對帝國主義。這時，帝國主義和這種國家之間的矛盾成為主要的矛盾，而這種國家內部各階級的一切矛盾（包括封建制度和人民大眾之間這個主要矛盾在內），便都暫時地降到次要和服從的地位（甲種本，96ページ）。

この引用について新島はいう。「毛沢東は封建制度と人民大衆の矛盾を『主要矛盾』とよんでいる。そうすると『帝國主義が侵略戦争をおこなう』前は主要矛盾が二つあってよいことになるではないか」（144ページ）。

ここでは「主要的矛盾」は「主要矛盾」との関係において使われていることに注目せよ。つまり帝國主義との矛盾が「主要な矛盾となる」とき、封建制度とのかつての主要矛盾は副次的・従属的地位に地位が変化するのである。逆にいえば、封建制度との矛盾が主要矛盾であるときには、帝國主義との矛盾は「主要矛盾にはならない」のである。「ある」と「なる」とは峻別しなければならない。この区別なしにはこの文章は全然読めない。われわれが中国語を読む場合には〈視点の移動〉が決定的に重要であることを強調するのは、このことなのだ。新島の先の文章は、この引用が全く理解できていないことを示すのではないか。新島はもう一つの例をあげる。

在複雜的事物的發展過程中，有許多矛盾存在，其中必有一種是主要的矛盾（甲種本，95ページ）。

新島は「一種」を『一つ』と訳したところに問題があった、「毛沢東は、一種といったのであって一個といったのではなかった」、「複数であってさしつかえない」などと述べているが、これは新島の中国語の水準（日本語の水準？）を暴露している。毛沢東がここで「一種」と表現したのは、「有許多的矛盾存在」のなかに主要矛盾が複数あることを示唆したのではなく、複数の「複雜的事物的發展過程」を想定してこういったのだ。つまり「複雜的事物的發展過程」はいろいろあるが、そのいずれにも多くの矛盾があり、そのなかから「領導的作用」という共通性に着目して一つをとり出すとき、それが主要矛盾たることになるといったのである。新島は『種』という量詞は一個ではない、「松村氏が原文を正しく読んでいないことを指摘せざるをえない」などと書いているが、「原文を正しく読んでいない」点では新島も同罪ではないのだろうか。新島のあげるもう一つの例。

不能把過程中所有的矛盾平均看待，必須把它們區別為主要的和次要的兩類，着重於捉住主要的矛盾，已如上述（甲種本，98ページ）。

新島曰く、『二つの種類』に分けよ、というのである。これは主要なものが一つではないことを予想しているとはよむのが自然ではないか（156ページ）。ここでは複数の対象を「領導的作用」をするものとしないうものに分けよ、といっているだけである。副次的なものは複数かもしれないが、「主要なものが一つではないことを予想している」とは必ずしもいえない。新島の読み方は決して「自然ではない」のである。

以上のようなわけで、主要矛盾が複数であると

する新島説は誤謬の合成の上に成立しているように思われる。主要矛盾とはそもそも複数の矛盾のなかから「領導的作用」「決定的作用」をする矛盾をとり出す概念なのであり、複数ではありえない。もし主要矛盾としてとり出したものが複数であるなら、そのうちから「最も主要な矛盾」をもう一度選択しなければならぬであろう(先の例3のごとく)。

新島説への批判は以上で十分かと思われるのであるが、あと二、三の点を指摘しておく。

新島曰く――

それは(根本矛盾をさす――矢吹)、個々の矛盾について研究するさい、これは他の矛盾を規定し、他の矛盾に強く影響するから根本矛盾だ、と判断をくださるのである。いいかえれば個々の具体的な矛盾の特殊性を分析するとき用いられる概念が根本矛盾である。これにたいして主要矛盾は、「事物の発展過程」(この場合の「過程」は、過程と段階という場合の過程ではない)全体・全局をとおして、つまり、個々の矛盾の特殊性の分析が終わった地点で、全体を主要な矛盾と副次的矛盾に、大きく二つにランクづけをするときの概念なのだ(145ページ、傍点は新島)。

この一節は新島の混乱を端的に示す。第1に「他の矛盾を規定し、他の矛盾に強く影響する」ものを根本矛盾と規定するだけでは、主要矛盾との区別が全くつかない。この規定は主要矛盾の説明ともなりうるのだから。根本矛盾を誤って以上のごとく規定するとき、根本矛盾＝主要矛盾とならざるをえないのである。第2に、主要矛盾が特殊性の分析が終わった地点で論じられるというのも誤りであろう。主要矛盾・非主要矛盾なる区別はいうまでもなく矛盾の特殊性にかかわる概念である。第3に「事物の発展過程」の「過程」と「過

程と段階」の「過程」とを新島は区別しようとしているが、これは無意味である。毛沢東が全く同じ意味で使っていることは見易い事実ではないのか。「事物の発展過程」から区別されるいかなる「過程」も「段階」もありはしない。

新島はまたいう。

「主要矛盾」が前章の「根本矛盾」を言いかえたにすぎないということは、第4章全体を注意ぶかく読めばはっきりとわかる。／これは(封建制度と人民大衆のあいだ、という主要矛盾をさす――矢吹)前の章では「根本矛盾」として叙述されていたものである。それを何のこともわりもなく「主要矛盾」といいかえている。これは毛沢東において「根本矛盾」と「主要矛盾」が同じものを指すことを示すものであろう。／それらの用例には、「主要矛盾」とともに、「基本矛盾」という、『矛盾論』には出てこなかった概念をも用いている(155, 156, 157ページ)。

これはまたなんという乱暴な議論であることか。根本矛盾たるある実体が主要矛盾たるある実体と実体として同じであるからといって、根本矛盾＝主要矛盾(さらには＝基本矛盾)としてしまったのでは、それぞれがそもそも関係的な概念であることが全くわからなくなる。矛盾とはそもそも実体ではなく関係にかかわる概念なのだ。基本矛盾が『矛盾論』には出てこない、というのも事実誤認である(例2をみよ)。以上の引用文は、要するに新島の「解釈が完全にあやまりであったことを示す」以外の何ものでもない(新島の表現による、『哲学』、147ページ)。

新島は最後に「国際共産主義運動の総路線についての提案」(1963年6月)のなかで、「現代の世界の基本矛盾」として四つの矛盾があげられていることについて、この「基本矛盾」が『矛盾論』

でいう「主要矛盾」だと主張している。「総路線提案」においてなぜ「基本矛盾」といい「主要矛盾」といわないのか。両者が同じだからでは決してない。「総路線」が「国際共産主義運動」にかかわるものであることに注目せよ。つまり、「現代の世界」の認識者は「世界各国の人民」なのだ（念のためにいえば、四つを基本矛盾と考えている主体は、この提案の中では「マルクス・レーニン主義者」と書いてある）。「世界各国の人民」はそれぞれの実践的・政治的視点から主要矛盾をさがし出すことができるであろう。しかし、この「総路線提案」の主体は中国共産党なのであって、中国共産党が世界各国の人民を代行して主要矛盾を規定することなどそもそもできない相談なのである。

一例をあげよう。毛沢東は『論持久戦』のなかで、エドガー・斯诺の間に次のように答えている（一卷本、411ページ）。

問：在什么条件下，中国能战胜并消灭日本帝国主义的实力呢？

答：要有三个条件；第一是中国抗日统一战线的完成；第二是国际抗日统一战线的完成；第三是日本国内人民和日本殖民地人民的革命运动的兴起。就中国人民的立场来说，三个条件中，中国人民的大联合是主要的（傍点は矢吹）。

傍点の部分をおれわれ日本人民は次のように読まねばならないのである。「就日本人民的立场来说，三个条件中，日本人民的革命运动的兴起是主要的」と。このようにみえてくると、主要矛盾について〈段階の視点〉からの把握というだけではまだ不十分であり、主要矛盾とは人間の〈主体的実践〉の観点からの矛盾把握であり、まさにこの点こそが決定的に重要であることが明らかになるのである。「教義暗記的、神学的適用しか考えない怠惰な『哲学者』は恥じるがよい」（164ページ）と

いう新島のことはわれわれの自戒のことはとして受け止めておくことにしたい。

最後に根本矛盾が複数であるとする誤解を正しておきたい。

例 5. 人民大衆和封建制度的矛盾，用民主革命的方法去解决；殖民地和帝国主义的矛盾，用民族革命战争的方法去解决（甲種本，83ページ）。

例 6. 過程之反帝反封建的民主革命的性質（其反面是半殖民地半封建的性質），并没有变化。

上の二つの例文を比較せよ。例5において矛盾が二つと数えられることは明らかだが、この例から例6を類推したところに「根本矛盾複数説」の致命的な誤りがある。例5は矛盾を個別性においてとらえひろいあげたものであるが、例6は決してそうではない。「反帝反封建的」（その反面たる「半殖民地半封建的」）は〈反帝+反封建〉としてではなく〈反帝=反封建〉として一体として、一つの矛盾として把握されているのだ。逆にいえば例6における「民主革命」は〈反帝=反封建〉の内容をもつ「民主革命」なのであり、例5における「民主革命」とはその内容を異にしている。根本矛盾なる概念は、たとえば例6のごとく「民主革命」を把握したときの〈反帝=反封建〉、つまり帝国主義=封建主義という一つの矛盾を指すのであり、このときこそ「ブルジョアジーの領導する旧民主主義革命」と「プロレタリアートの領導する新民主主義革命」という段階の大きな相違にもかかわらず、「民主革命」が「過程の本質」となるのである。およそ以上の意味で根本矛盾は一つであり、根本矛盾が二つ以上であるような「過程」（事物の発展過程）は想定できない。

けっきょく、根本矛盾・主要矛盾はその概念規定からして一つであるほかになく、基本矛盾は前2者とは異なり数に限定はないということになる。

竹内実はいうまでもなく松村一人の共訳者であるが、竹内の『矛盾論』理解を示す文章に気づいたのでコメントを加えておきたい。その文章とは「毛沢東『矛盾論』の原型について」(『思想』、1969年4月)である。竹内はここで艾思奇『研究提綱』と『矛盾論』との異同を論じているが、われわれの課題は竹内の『矛盾論』理解の検討であるから、竹内の主張の一部を対象とするだけである。

「研究提綱」は……「過程」＝「基本的矛盾」、「段階」＝「主導的矛盾」と区別した説明をおこなっているのに、「矛盾論」には、このような説明がない。／「根本的矛盾」と「主要な矛盾」とについて、それぞれに説明がおこなわれながら、その相関関係について説明がなかった点は重大な手落ちとしなければならないだろう。／この欠落(第4章において「過程」＝「根本的矛盾」の説明が落ちていること——矢吹)が軽視できないのはすぐつぎの段落では、「過程」における「主要な矛盾」が説明されていることからわかるであろう。論理として、「過程」＝「根本的矛盾」、「段階」＝「主要な矛盾」という区別が、それほど重んじられていないように感じられる。／艾思奇のように、「過程」＝「基本的矛盾」、「段階」＝「主導的矛盾」という固定化がないところに、毛沢東の考えかたの傾斜があらわれていると考えられる。／「研究提綱」の定義(「基本的な側面は、必ずしも発展の主導的側面ではない」をさす——矢吹)は、「矛盾論」風にいいかえるなら、「根本矛盾の主要な側面は、必ずしも発展の主導的側面ではない」となるはずである。

竹内の『矛盾論』に対する不満は、この場合次の2点に集約しうるであろう。第1は「過程」＝「根本的矛盾」、「段階」＝「主要な矛盾」という区別が、「それほど重んじられていないように感

じられる」ことであり、第2は両者の相関関係を説明する論理の欠如(「重大な手落ち」)である。

竹内の批評は正鵠を射ているであろうか。否である。竹内の批評はその理解力の貧困を示すものでしかない。第1の論点についていえばすでにわれわれが論じたように、毛沢東は両者を厳密に区別し、その内容を論理的に説明しているといっている。第4章において、「過程」＝「根本的矛盾」の説明が落ちていると竹内はいうが、これはいうまでもなく第3章で説明済みのことだ。竹内がこういうのは、「すぐつぎの段落では、『過程』における『主要な矛盾』が説明されていることから」(傍点は竹内)であるが、竹内が傍点を付した「過程」は、実は論理的には「段階」の意であることを竹内を読みとれなかったことを告白しているだけである。くり返しになるが、論理的には「段階」を意味する「過程」と「根本矛盾」にかかわる「過程」との区別が竹内にはわからない。「過程(guòchéng)」を「過程(カテイ)」と読むのは「漢文訓読」であって中国語の読み方ではない。

次に第2の論点であるが、毛沢東は第3章で根本矛盾を論じ、主要矛盾は第4章としてわざわざ独立の章を設けた。「このように章を分けたのはよいとしても……その相関関係について、説明がなかった点は重大な手落ちとしなければならないだろう」と竹内はいう。竹内の要求する説明とは何だろう。〈過程の視点〉から根本矛盾を把握し、〈段階の視点〉から主要矛盾を把握した毛沢東にとって、両者の相関関係は自明であり、これに何を付け加えよというのか。先に引用した「矛盾論風のいいかえ」がそれらしい。この「いいかえ」なるものは全く文意不明であり、竹内の非論理を暴露しただけにすぎない。さて以上のようなスコラ論議によって竹内が見失ったものこそより重大で

ある。主要矛盾は、根本矛盾との関係でいえば〈段階の視点〉からの矛盾把握であるといちおう説明できるが、より重要なのは、前にもふれたように主要矛盾が〈実践の視点〉からの矛盾把握であることだ。毛沢東が「章を分けた」理由はまさにここにあるのではないか。(未完)

(注) 本稿はもともとわれわれのタイプ刷同人雑誌『中国の文化と社会』第3巻第5・6・7・8号に連載したものである。半年後のいま読み返してみると不満な箇所ばかり目につくが、全面的に書き改めるために十分な時間的余裕を見い出せないで、とりあえずそのまま転載することにした。ご了承願いたい。

ただ次の点だけはつけ加えておきたい。その後『実践論』を調べて、以下の三つの表現に気づい

た。

- A 認識的感性階段(甲種本, 49ページ)。
- B 感性認識的階段(甲種本, 54ページ)。
- C 感性的認識階段(甲種本, 54ページ)。

Aの訳が「認識の感性的段階」、Bの訳が「感性的認識の段階」であることは明らかであろう。問題はCであるが、既訳の訳者たちはすべて、これをAではなくBと同じく訳している。むろん正しい。つまりBとCとでは「的」の位置が異なるが意味は同じなのである。さてCが「感性的認識の段階」である以上、この文節と同じ構造をもつ「主要的矛盾方面」が「主要矛盾の側面」と読むべきであることはもはや立証された、といっているのではないだろうか。

(調査研究部)

アジア経済研究所刊行

海外投資シリーズ

メ キ シ コ
——経済と投資環境
岡部広治編
A5判/474頁/¥1500

▷背景/自然・住民・歴史/政治・社会・文化・教育▷経済/国民経済/経済政策/各産業の現状/財政金融と貿易管理/労働事情▷日本との関係/メキシコとの貿易/日系企業▷資料/メキシコの日系企業に対するアンケート/メキシコに投資している日本の企業に対するアンケート▷付録/メキシコ合衆国憲法/新規・必要産業助成法/企業体制/参考文献▷文中図—23図/表—152表

研究双書第174集

モンゴルの政治と経済
坂本忠著
A5判/206頁/¥650

躍動するモンゴルを、その自然と住民・歴史・政治・経済全般にわたって多角的に権観する▷自然と住民▷歴史—非資本主義的發展の道/モンゴル革命の性格/2段階革命と反封建闘争/社会主義建設▷政治/新憲法と政治機構/モンゴル人民革命党/国際関係▷経済▷社会・文化▷資料/人民共和国年表/人民共和国憲法/人民革命党綱領/人民共和国農牧業協同組合規範定款

研究双書第172集

インドネシアの社会構造
馬淵東一・岸幸一編著
A5判/452頁/¥1400

インドネシアの社会構造における基礎的な問題としての慣習共同体の分析を通じて、社会構造の構造的特質を明らかにし、それが現代の社会構造に残す遺制について解明する▷インドネシア民俗社会の理解のために▷インドネシア慣習法共同体の諸様相▷インドネシアの都市と村落についての覚書▷インドネシアの社会構造——地域別研究▷土地制度史と土地改革

アジア経済出版会発売